

心肺運動負荷テストと運動療法

編集 谷口興一(群馬県立心臓血管センター総長) B5判, 366頁
伊東春樹(心臓血管研究所付属病院副院長) 南江堂, 2004年
定価 9,975円
(本体 9,500円+税 5%)



今回、谷口興一、伊東春樹の両博士により運動療法に関する最新本が上梓された。執筆陣を厳選して少数精鋭による発行である。この執筆陣は、心肺負荷テストの権威である Wasserman を定期的に招聘してその普及に努めるといふ熱血漢達でもある。この時期に、運動療法に関する両巨頭の編集執筆による本書の出版は、誠に機を得たものという感じがする。

実は本書はすでに出ている『心肺運動負荷テスト』の後継本であり、小生も前の負荷テストに関する編集本を愛読していた。この先行本は生理学の知識をまとめ、実際のフィールドに生かすための試金石となる書物であると認識していた。とくに心肺運動負荷は一部の呼吸器や、運動生理学に通じた専門家のものであり、なじみが薄いと考えていた臨床家も多かったことと思う。両編集者らが長年この分野のリーダーとして、研究に、さらに臨床に普及を心がけられた成果がそこにはあった。専門知識を体のからくりを解くだけではなく、その機能不全に対してどう臨床家がアプローチするか、できるかという問いの答えが常にその本の中にはあった。今、心臓運動療法は心不全の運動療法という、いわば究極的な命題を前にして、チーム医療として進行している。予後改善、QOL 改善のための全人的なアプローチの時代になったと考えられる。心臓、肺、末梢臓器、あるいは筋骨格系をそれぞれ分離した臓器として考える個別臓器医療から、人間が営む行為を調和の機構と捉えてアプローチするには、心肺動態を評価することはいかに重要である。話は長くなったが、運動療法の原点を考えると、この心肺負荷に対する理解、そして実践は必須の時代になっている。これは現代のミクロの遺伝子医療、臓器移植、さらには再生医療が進んでも変わらない。

この新刊書には、時代を反映してか新たに“運動療法”の名前がタイトルに入れられ、よりその目的が明瞭になっている。内容も、生理学的な面を重視するものから運動の実践面での充実が計られている。大きく3部に分かれ、第1部は生理学的な理解、これは必須の部分である。人間に不可欠な酸素輸送の原点がいかに

巧妙で、どのようなプロセス、因子、指標で現れてくるかがつぶさに説かれている。心肺負荷テストの現実的な実践については次の第2部で述べられている。これも両編集者らの独壇場であり、あますことなくその負荷テスト実践への基礎知識が披露されている。本当の専門家の言葉は簡潔にして要領が得やすい。ここでは最近のトピックスを含めた MRS や自律神経系の関与、さらには心不全に関わりの深いサイトカインについても、専門家の目で述べられている。この章は心疾患と呼吸器疾患の各論で完結する。

この本の購買者の多くは、その後の第3部の運動療法と運動処方の実践的な益を求める層ではないかと考えられる。この最終部では、まさに毎日が実践そのものであり、かつ日本を代表してのリーダー的な存在の執筆陣らが担当し、きめの細かい指導がされている。実際、谷口博士の施設は日本を代表する循環器センターであり、かつ運動療法を実践的に取り入れ、この方面のリーダーとして活躍中であるし、伊東博士も東京の中心部で先進的に運動療法の普及に活躍中である。この両施設に関わる執筆者らがその豊富な知識と経験で語りかけてくれる。いわば実践の書としてのみでもこの本は購買の価値がある。往々にして執筆陣が多いと、その統一性が取れず、読み通すことがむずかしいものがある。この本の執筆陣は常に仕事をともにしている理念・目的が一致している先生方である。通読できる面でもよい読み物である。小生らもこの方面での書物を上梓したことがある経験上、読めばいかにその知識が実践から出た本物であるかが、たちどころに判明するものである。その意味ではこの新刊書はまさに本物であり、構成、内容、執筆陣どれをとってもよくできた up to date な書物である。読者らがこの本を傍らに置いて日常臨床に生かされることを願うものである。

評者 ● 野原隆司

(財)北野病院副院長、循環器科部長)